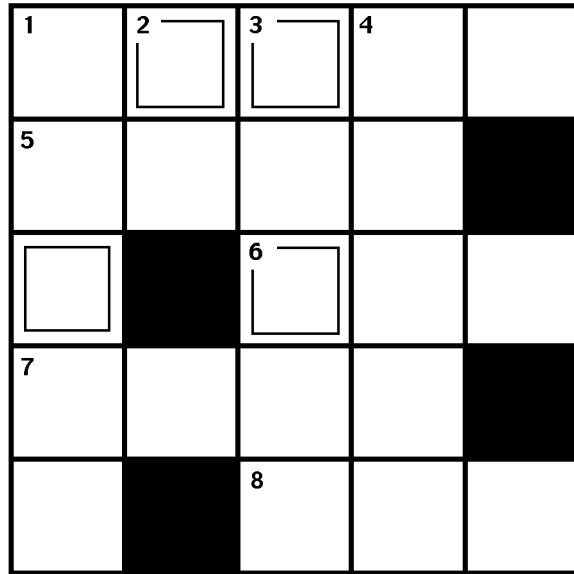


答えのヒント
『絹糸を作る』
正解は次号で
発表します。



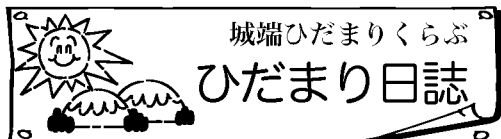
タテのカギ

- 1. 城端で千本格子の呼びかた
2. 肉眼で見えること
3. 清少納言のくちぐせ?
4. 『おくりびと』の仕事は?

ヨコのカギ

- 1. 江戸彼岸の銘木 ○○○○桜
5. ガトウガラシ
6. そくそくとした磨け
7. とりとめのない感想
8. 茶碗・茶入れなどを入れる袋

「お丑」をこの語唄



その7 「桜の植樹」

ひだまりくらぶで熱心に活動して下さった伊藤 昭さんが事故のため逝去されました。伊藤さんは生前、城端に桜の名所を作ろうと、四年前からトナミロイヤルゴルフ倶楽部横の斜面に一人で桜の苗木を植えてこられました。

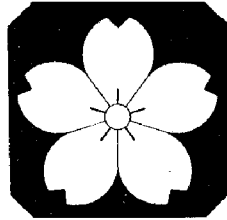
遺志を継ごう、と御遺族・とやまさくら守の会・ひだまりくらぶ、そして伊藤さんと一緒に遊んだ子どもたちと保護者らが、桜の若木を50本植樹しました。

いま我々が愛でている桜は、すべて先人が植えたものです。後の人の為に桜を植えようという行為は、尊いことだと感じます。

伊藤さん、ほんとうにありがとうございました。

hidamari.blog.nanto-e.com

【ひだまり日記】携帯からも見られます



山桜

桜好きな国民性のせい、桜紋のつけるのを敬遠したためか、武家の桜紋は少ないようです。



その14 桜

日本人は桜に特別な思入れがあるようです。奈良時代の貴族は梅を觀賞していましたが、平安から桜を愛でるようになり、江戸時期に至って庶民も花見を楽しむようになりました。桜の散り際の潔さを良し、としながらも、身につけるのを敬遠したためか、武家の桜紋は少ないようです。

種類は豊富です。ハートを5つ組み合わせた桜紋に、裏側をみせた裏桜、一般的な桜のイメージの山桜、おちよぼ口になった雀口桜、など百種類以上あると言われています。城端小学校の校章も桜に雪輪と城の字を組み合わせたものです。余談ですが、警察のシンボル、いわゆる桜の代紋は昇る朝日をかたどった旭日章ですので、桜紋とは違います。

ご存知でしたか?



織物の里 なんと(川上郷)

南砺は織物の一大産地だったのです。

【福野手織】

慶安二年(1649)頃から、綿花を手紡ぎして自家用の木綿織物を作っていた。織物業が始まったのは寛政年間(1789~1800)で手織屋源四郎が加賀藩から布を織るよう命じられたことに由来するという。

その後、文政三年(1820)に美濃国(岐阜県)から岡崎新左衛門らの職人を招いて、棧留織の一種「菅大臣織」を織り始めた。こうした織物を「手織」と称したのである。

それ以降、加賀藩の奨励で生産は増加し、文政年間(1818~1830)には居座機から高機にかわっている。

さらに明治以降は輸入物の細い紡績糸を用いたことから各地で需要が高まり、明治末期には賃機が九百軒にもなったという。また明治中期からは福野緋も織られ、大正期には非常に栄えたが、太平洋戦争後は次第に衰退した。

【福光麻】

江戸初期には八講布、呉郎丸布などと称された。八講(はっこう)は小矢部市八講田、呉郎丸(ごろうまる)は隣接する小矢部市五郎丸の特産だったが砺波地方に拡散した。また小矢部川の上流地帯(川上郷)で産したところから川上布ともいわれた。伝説によると延暦13年(794)に初めて麻布を織ったというが、天正年間から慶長年間(1573~1615)にかけては、加賀藩が奨励したことから盛んに生産された。

江戸時代の麻布は経糸が五箇山近在の地苧、緯糸は最上産の青苧を使用、その種類も多く、紋布、布縮縞、蚊帳、虎縞、経に綿糸を用いた縞布などを織り出していた。現在では群馬、栃木産の大麻に、苧麻を一部に使用。

苧績みはすべて手作業で行い、糸車で撚りをかける。機は居座機、高機を使い、織り上げたあとは灰汁水に漬けて晒し、木槌で打ち、さらに水洗いして天日に晒す、という作業を20日から30日ほど繰り返す。衣料のほか幕、茶巾、蚊帳、畳縁用にされ、昭和40年代までは盛んだったが、現在は非常に少なくなっている。

【城端絹】

もともと城端のあたり一帯、砺波地方は織物が盛んな土地柄であった。城端でいつ頃から織物が始まったのか明らかではないが、一説によれば天正年間(1573~1592)頃からだという。絹は五箇山や川上郷の繭や生糸を用いた。当初は節絹と呼ばれる粗い絹だったが、元禄年間(1688~1704)頃から質が向上し、「絹屋」を屋号とする家も生まれた。

元禄六年(1693)の記録によれば、城端の戸数は689軒だが、そのうち375軒が絹に関係していた。江戸時代には加賀藩の庇護のもと「加賀絹」の名で、小松絹と一緒に売られた。当初上方へ送られていたが、後に江戸に送られるようになり、商人が端唄を習い帰ったことが城端曳山祭独特の庵唄の原型となる。

明治初年の城端町の戸数は約1000戸でその九割に手織機があり、チンカラ機と名付けられた居座機で、節絹あるいは小川絹と名付けられる薄絹を織っていた。日清戦争後には効率の良いバツタン機が導入され生産量が増えた。加えて明治39年には五泉より技術者を招き、羽二重と紹織も始まった。

明治末期には動力織機による操業が始まり、絹業が飛躍的に発展する。大正年間の絹産額は富山県全体の40%を占め、第二次世界大戦前は35%、戦後も40%を占めていた。

城端では絹や紗のほか、羽二重、さらに撚糸機の導入により縮緬・壁織など多種多様な絹織物を生産。絹と紗で全国生産量の30%を占めたこともあった。そのほか「釣地」と称する伊勢型紙の紗張り用の紗を織っていた。

【井波紬】

天正年間(1573~1592)に居座機で生絹を織っており、文政年間(1818~1830)から紬織が始まったといわれる。

井波紬は手紡ぎの太糸を用い、刈安など植物染料で主に茶褐色に染めて織り上げたもので、独特の風合いを持っていた。そのため着尺や茶人のコートなどに用いられたという。

最盛期は大正年間だが、その後衰退し、昭和19年に消滅した。



発行

きよべ呉服店

0120-62-0227

蔵布都 藍(くらふとらん)

0763-62-3118

富山県南砺市城端499

にしまち通り

FAX 0763-62-3733

WebSite(URL)

craft-ran.com/kiyobe

E-Mail

kiyobe@craft-ran.com

